

母親の愛着形成に関する研究 — 出産形態と環境因に着目して —

笛 吹 素 子

問題と目的

母親の子どもに対する愛着形成や養育態度を規定する要因については、これまでにさまざまな領域において研究がなされてきた。しかしながら、こうした母性意識や母性行動の違いは、そもそもなぜ起こってくるのかという問題を扱っているものは多くはない。そのため、近年愛着をめぐる研究は新たな展開を迎え、多くの研究者の関心が、外的に把握できる愛着行動や具体的な相互作用から、徐々に内在化された表象レベルの愛着関係に移行してきている。

愛着研究の中で表象の問題を最初に取り上げたのは、愛着理論の提唱者である Bowlby (1969, 1973, 1980) であった。Bowlby は、子どもが愛着対象（主に母親）との間で繰り返し行われる母子相互作用を通じて、愛着対象がどれだけ自分からの働きかけや要求に応じてくれる存在であるかどうか、さらには自分が愛着対象からの関心や援助を受けるに値する存在であるかどうかに関する主観的な確信・表象を形成すると考え、この主観的な確信・表象を、愛着対象、あるいは世界に対する内的ワーキング・モデルと定義した。具体的には、母親が支持的で応答的である時、子は母親を良いもの、“安定した” (secure) ものとして内在化し、さらにそれに応じて自分を価値ある存在、愛され、助けられるに値する存在と表象可能になる。一方、母親が非応答的であったり、拒絶的であるような時、子は母親を悪いもの、“不安定な” (insecure) ものとして内在化し、それに応じて自分が愛され、助けられるに値しない存在であるという確信的な表象を作り上げてしまうという。そして、いったんこの内的ワーキング・モデルが固まり始めると、子どもはこれを1つのテンプレートとして様々な対人関係に適用し始めるという。つまり、愛着対象と自分の関係スタイルを基盤に、新たに遭遇する他者のふるまいを予測・解釈し、自分自身の行動のプランニングを行うようになる。結果的に、愛着対象と自分自身との関係に近似したスタイルが再生産されることになり、それを通じてまた、個人はその内的ワーキング・モデルをさらに強固にしていくことになり、ひいては人格の同一性が保持されることになると仮定していたのである。

このように、愛着理論は初めは乳児が愛着対象に対して向ける愛着を理解するための枠組みであった。しかし

ながら、上記のような流れの中で、愛着理論の枠組みを乳幼児期以降の年代にも適用する動きが生まれ、親をはじめ重要な他者に対する愛着は、乳幼児や児童のみならず、青年や成人の適応をも支えていることが示されるようになっていったのである (Hoffman, Usjpiz & Levi-Shiff, 1988; Kenny, 1987; Saltzman, 1989)。

成人の愛着表象について体系的な実証研究を始めたのは、Main, Kaplan & Cassidy (1985) である。彼らは、内的ワーキング・モデルの特質を把握するための体系的な手法として、成人愛着面接 (Adult Attachment Interview: 以下 AAI) (George, Kaplan & Main, 1985; Main & Goldwyn, 1998) を開発し、具体的な行動としてではない成人の表象レベルの愛着を実証的に解明する道を切り開いた。AAIは、主にこれまで、Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) が開発した SSP (Strange Situation Procedure) 等によって測定された、親が子どもに示す具体的な養育行動や子どもの愛着パターンと比較することによって、愛着の世代間伝達の研究において利用されてきた。しかしながら、個人が持つ内的ワーキング・モデルが、個人の対人関係のあり方や、行動特性に関連するかどうか、つまり、内的ワーキング・モデルが対人関係のあり方や適応を規定するという方向で、AAIを用いた実証的研究は、欧米圏においてしかなされていない。これまで、内的ワーキング・モデルが対人関係のあり方や適応を規定するという Bowlby の仮説を実証するため、個人の有する愛着表象と対人関係あるいは適応状態との関連について検討はなされてきたが、愛着表象を測定する方法としては多くが質問紙法によるものであった。そこで本研究では、AAIで測定される愛着表象の型の違いによって、母親の胎児に対する愛着や、パートナーとの関係、あるいはその他の対人関係のとり方との関連について検討すること、また、母親の適応状態や精神的健康と愛着表象との関連についても、探索的に検討する。

方法

対象は、N大学医学部附属病院産科を1998年9月から2000年11月までに受診した妊婦のうち、調査協力に同意が得られた36人をAAIの調査対象とした。調査は、妊娠初期（妊娠週数12-20週）と中期（妊娠週数20-24週）、後期（妊娠8ヶ月）の合計3回に渡り、縦断的に

行われた。AAIの実施に同意した者のうち、初回質問紙には36名、中期の質問紙には36名、後期の質問紙には29名が、それぞれ回答した。質問紙は、妊娠初期にデモグラフィック要因、妊娠がわかった時の自分の気持ちと周囲の反応、「将来の出産・育児への不安尺度」(本城ら, 2001)、抑うつを測るために、SDS (Self-rating Depression Scale) を使用した。妊娠中期には、夫への愛情を測る尺度としてMarital Love Scale (菅原・詫摩, 1997)とAAIを、妊娠後期には、胎児への愛着を測る尺度として、Maternal Fetal Attachment Scale (Clanley, 1981)、一般的な対人態度を測るものとして、「対人関係における自己と他者についての認識尺度」(戸田, 1988)をそれぞれ実施した。

結果

被験者の特性は以下の通りである。初回調査時の母親の平均年齢は、30.4歳 (SD=4.3) であり、20歳から41歳までに分布していた。就労形態は、専業主婦が70.2%、パートタイム就労者が9.2%、フルタイム就労者20.1%、学生が0.2%であった。また、調査対象者の世帯の平均年収は、604.10万円 (SD=322.62) であった。調査対象者の最終学歴は、中学が6.7%、高校が28.0%、専門学校が14.1%、短大が30.4%、大学が19.5%、大学院が1.4%であった。また、初産婦は60.4%、経産婦は39.6%であった。なお、夫婦の平均結婚年数は3.55年 (SD=3.04) であった。

AAIは、面接の録音テープを書き起こしたトランスクリプトを、Mainらのトレーニングを受けた評定者2人が独立に評定した。評定者間の一致率は83.0%であった。評定にずれがあった場合には、協議により評定を一致させた。その結果、過去の愛着体験に価値を置き、その経験について客観的で、一貫して語ることのできる「Secure-Autonomous」に分類された者が29人、愛着関係に価値を置かず、愛着関係を自分の発達から切り離し、一貫した形で語れない「Dismissing」に分類された者が6人、過去の愛着関係にまだにとらわれており、一貫した形で語ることのできない「Preoccupied」に分類された者が1名であった。なお、今回の研究では、「Unresolved」に分類された対象者はいなかった。先行研究にならい、過去の愛着経験を統合し、安定した愛着表象を形成している「Secure-Autonomous」に分類された者を「愛着安定群」、過去の愛着経験を統合しきれない「Dismissing」あるいは「Preoccupied」

に分類されたものを「愛着不安定群」として、以下の分析に用いることとした。

考察

本研究では、幼少期に親あるいはそれに順ずる対象との関わりの中で培われた愛着表象が、実際のその対象との間だけではなく、その後の対人関係や適応状態に重要な影響を与えるであろうという観点から、愛着表象の型により、個人の対人関係や、認知スタイル、あるいは精神的健康度に違いがあるかどうかを検討した。

その結果、愛着型が不安定な母親と安定型に分類された母親では、胎児愛着得点に有意な差がみられ、安定した愛着を有する母親の方が、胎児に対する愛着が高いことが示唆された。一方、夫への愛情や一般的な対人関係に関しては、愛着表象の型による有意な差はみられなかった。また、精神的健康度に関しては、不安定な愛着を有する母親の方が、安定した愛着を有する母親に比べ、妊娠初期における将来の出産や育児に対する不安感や、一般的な抑うつ傾向が高いことが示された。この結果は、不安定な愛着は精神病理への傷つきやすさを形成するとする仮説 (e. g. Lewis & Feiring, 1991) を支持するものであった。そのため、これらは、将来的には産後のマタニティー・ブルースや育児ノイローゼといった問題にまで発展していくことも予測される。このような問題を未然に防ぐためにも、不安定な愛着を有する者に対し、妊娠の早期から臨床的な介入を行っていくことが望まれる。

今後の課題として、愛着表象との関係性を予測するために検討した、夫婦関係や一般的な対人関係のスタイルについては、今回の結果からは愛着表象の違いによる有意な差は見られなかった。この点については、今後調査対象者を増やし、測定方法を再検討することが必要であると思われる。また、今回の研究では妊産婦という、調査対象者の特異性もあり、さらにAAIの実施には拘束時間も長く、また心身ともに負担の大きい時期での調査依頼ということもあったため、子どものいる経産婦の被調査者数が相対的に少なくなってしまう。その結果、本研究においては、母親のもつ愛着表象が、その他の対人関係に与える影響について検討することを第1の目的としたために、母親が経産婦か初産婦かといった問題について言及することをしなかった。今後は、愛着表象の型に加え、子どもの有無についても統制していくことが必要であると思われる。